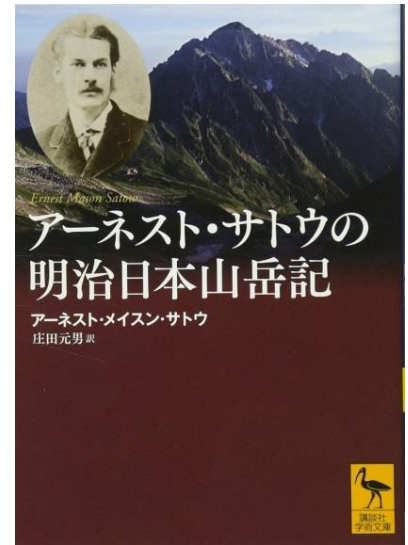


E. サトウ著『アーネスト・サトウの明治日本山岳記』

日本近代登山の幕を開けたのは、明治初期の政府お雇いの来日外国人達であったことはよく知られている。日本近代登山の父と言われ、上高地で銅像にもなったウォルター・ウェスンが有名であるが、ウェストンに先がけて日本各地の高山に初めて登った外国人は、ウィリアム・ガウランド（大阪造幣局お雇い技師、御嶽、立山、槍ヶ岳）やアルベルト・ホーズ（海軍省お雇い、爺ヶ岳、甲斐駒）、ジョン・ミルン（帝大お雇い地震学者、磐梯、鳥海山、浅間山）、その他、八ヶ岳、白山、立山に登った R.アトキンソン（開成学校教授）、ここに紹介するアーネスト・サトウ（駐日外交官）など枚挙の暇がないくらいであるが、特に E.サトウは日本アルプスだけでなく北は北海道から南は鹿児島まで各地を探訪してその記録を「旅日記」や「旅行案内」として欧米に紹介した人物であり、また、25年間に亘り外交官や英国公使として駐日、見聞した明治維新の日本の様子を記した自叙伝『一外交官の見た明治維新』は今でも維新研究の重要な資料とされている。



さて、前置きが長くなった。本書は、彼の著作『日本旅行日記』及び『中央部・北部日本旅行案内』から、現代の我々にも人気のある富士山、日本アルプス、日光・尾瀬、吉野・熊野を抜き出して新たに再編集されたものである。

富士山は現在の主な登山ルートである吉田口などの4本も紹介されているが、今は廃道となってしまった「人穴口」や「御中道一周巡り」なども記載されていて興味深い。現在では藪や沢崩れに埋もれてしまった E.サトウが歩いたこれらの古道を往時の旅装束で辿ってみるのも一興ではなかろうか。

今ではどのコースも5合目まで車で入れるが、往時は東京から馬車や俵や馬や徒歩の乗り継ぎで行かざるを得ず、従って、当時の山麓道中の案内も載っていて往時の旅の姿が彷彿としてくる。

また、「日光から金精峠。尾瀬・八十里を越えて新潟へ」や「吉野から熊野へ」の章は、現在でも辺境のロングランでこれを通しで歩く人は余り居ないのに、当時の外国人としてよくぞ歩いたものと感心させられる。特に「吉野熊野」では山伏修験の伝承や奥山の山村民俗の歴史なども記されていて、我々日本人でも知らないような事柄が興味深い。道中での古老からの伝聞に加えて著者の日本文化への飽くなき探求心の表れでもあろう。

「秘境奈良田からの南アルプス初登頂」の章は、往時は相当の秘境であったであろう獵師道を性悪な案内人に往生させられたり宿の蚤に苦しめられたり、今では姿を消した籠の渡しに吃驚したりしながらの道中記である。歩いたことがある人は、今と当時のありさまを比べながら読まれると面白いであろう。

当時の日本の奥地を歩いた外国人の紀行は、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』が有名であるが、そちらはどちらかと言えば欧米人にとって当時の旧弊な秘境であった外国・日本の珍し物見たさの弊があるが、本書はそのような先入観が無いところがよい。翻訳もこなれた読み易い文章になっている。

日本に近代登山が始まって120年、当時の登山の様子を振り返ってみるのも一興ではなかろうか。余談であるが、植物学者でありまた日山協初代会長を務めた武田久吉博士は著者の次男である。

庄田元男訳 講談社学術文庫 2017年4月刊 980円

(酎、2018年6月記)